



Title	トン族の音楽が語る文化の静態と動態
Author(s)	薛, 羅軍
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41998
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 薛 羅 軍

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 5 1 1 0 号

学 位 授 与 年 月 日 平成12年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科芸術学専攻

学 位 論 文 名 侗族の音楽が語る文化の静態と動態

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 山 口 修

(副査)

教 授 根 岸 一 美 教 授 天 野 文 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国の少数民族に関する音楽的民族誌（モノグラフ）である。広大な中国に住む公称56の少数民族については、フィールドワークに基づく詳細な民族誌は未だきわめて数少なく、まして音楽という特定の領域に的をしばったものとなるとほとんど皆無と言っても過言ではない。その意味で、本研究で示された徹底的な記述の態度は中国音楽研究のみならず、人類の音楽遺産を広く理解してゆこうという機運の高まりにあって貴重な知識を提供するものである。論者の意図はまさにその点に向けられており、そのために歴史と現在に関する基礎情報を提供すべく題目もつけられている。

本論文はまず、序論「音楽が語る文化の静態と動態」においてテーマ設定、資料収集の問題を示し、文化を形成し保持する傾向性としての静態、および文化を時代の変遷とともに変容させようとする動態という二つの観点を示すことにより、音楽的民族誌の立場が述べられる。そして、その研究の実現のために、文献研究をおこないつつも、主眼をフィールドワークにおくという方法上の立場が述べられる。そして、現実に対象として選定した地域において明らかにその音楽文化の根幹を占めると判断される「琵琶歌」とそれを支える楽器である侗族琵琶の存在を指摘し、それらについての先行研究を整理することによって本論への導入としている。

続く二つの章は、音楽を理解するために必要不可欠な社会的および歴史的背景を記述することにあてられている。すなわち、第1章「多民族社会としての中国」では、少数民族一般にみられる服装・食・住居・交通といった生活局面を描きつつ、ひとつひとつの民族によって異なる文化の事象や項目の存在が指摘される。第2章「侗族の概況」は、主たる対象として選んだ特定の集団が営んできた生活を概略することが目的ではあるが、そのこと自体は本論の主目的ではなく、むしろ続く二つの章で主目的として設定される音楽の理解に役立つ側面を強調したかたちで論がすすめられている。すなわち、侗族居住の地理的位置から始まって、生活・家庭・婚姻などが記述されるのみならず、彼らの信仰生活を根本から支える祖母神「薩歳」について、その呼称の多様性、建築物や祭祀のあり方などを詳細に論じている。同じく彼らの音楽生活を支える「公民館」的な集いの場である「鼓楼」についても、その由来、建物としての構造、そこで展開する文化活動などが記述される。

論文の主要部分をなすのは第3章「侗族の音楽ジャンルと楽器」および第4章「侗族琵琶歌の文化化の機能」であるが、これら二つの章のあいだにも先行する章が後続の章を正しく理解するための基礎情報を記載するものであるという構成になっている。すなわち、第3章は侗族が育んできた音楽ジャンルと楽器遺産を網羅的に提示するのである

が、当然、「分類」という視点から体系的な秩序のなかにフィールドデータを整理したものとなっている。続く第4章はまさに本論文全体の中核部分を成すものであり、文化人類学の用語である「文化化 acculturation」という切り口で音楽文化の本質を整理している。あつかう音楽ジャンルとしても「侗族琵琶歌」に限定することにより、論点を明確に打ち出し、結果、この音楽ジャンルに付与された社会的機能として「伝承教育的」「交流的」「娯乐的」「社会組織的」「文化蓄積的」「民族史・民族誌的」「儀礼的」といった項目を挙げている。したがって、第4章が静態をあつかう部分である。最後に結論「現代化の過程における少数民族文化」において、現代から未来にかけて変容を余儀なくされている状況のなかで伝統的要素がいかに保持され、かつ、新しい要素がどのように加味されるのか、観察と予測により述べられている。すなわち、動態の問題である。

巻末には付録が設けられており、詳細な調査記録や文献・地図・写真集が本論展開の背景情報として貴重である。
(分量 本文110頁 400字換算約330枚 付録等45頁)

論文審査の結果の要旨

地球上に存在する無数の民族集団は、それぞれが独自の居住環境と歴史に裏づけられた、他とは異なる音楽文化をもっている。したがって、人類の豊かな音楽遺産を可能なかぎり正確かつ詳細に理解するためのデータを収集し分析するという記述的・民族誌的研究がいくら推進されてもされすぎることはない。本研究は、そうした要請に応えるべく、オリジナルなフィールドワークを反復実施し、豊富な民族誌的データを示したものとして高く評価される。また、文化を一面的に捉えるのではなく、環境や周辺民族との関係、集団内部での世代による異同を指摘したり、多角的な視点に基づいて体系的な提示をおこなうといったまとめかたを採用しているので、他の事例と比較する必要性が生じた場合に役に立つであろう。さらに、フィールドワークが論者の幼少時に当地で生活したことのある異文化体験の延長におかれているため、偏見のない文化相対主義的観点を徹底したものとして貴重である。

ただし、本論文にいくつかの短所も見受けられることも否定できない。たとえば、主な研究課題としての「静態」「動態」についての理論的考察がほとんどなされていないのは大きな欠陥である。また、静態と動態をあつかう分量のバランスが悪く、今後の課題として文化動態論を厳密に試みる必要があるにちがいない。資料集に収められたものは、それぞれ貴重な情報を伝えてくれるものではあるが、本論との関係からすれば厳選するなり、本文中にちりばめるなどの工夫をすることにより、いっそう値打ちのあるものとなっていたにちがいない。

しかしながら、これらの短所は本論文に続くものとして今後補われてゆくべき性質のものであり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。本論文は、少数民族に関わるフィールドワークの手法を盛り込んだ音楽史学研究として従来の水準を超える優れた論考である。よって本研究科は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。